

# 南阿蘇って

石橋  
いいな  
板碑

点在する文化財を訪ねて

(随時掲載)

神体

伝統

歴史

歌碑

文化

寺社



柔和なお顔とその威容に圧倒されます  
(くまモンの高さは約50センチです)

## 典型的な癒し系では

南阿蘇の田園地帯も田植えがすっかり終わり、夜ともなれば力エルの大合唱が聞こえてくるようになりました。季節の移ろいを感じたそんな日、私の住んでいるすぐ近くの夜峰山を見上げますと

青々とした夏草が輝いていました。

今回は、この夜峰山のすそ野にある通泉寺を訪ねてみました。

とその前に、先月号でお勉強したことを思い出してくださいね。

まず仏像はおおまかに如来、菩薩、明王、天の四つに大別されていましたね。

私たちが一番身近に感じられるのは菩薩の中の地藏菩薩と観音菩薩ではないでしょうか。中でも観音菩薩は三十三に姿を変え、人々をあらゆる方向から救ってくれるということから、平安時代以降は三十三ヶ所観音霊場めぐりが各地で盛んに行われるようになり、観音信仰が大いに広まったとされています。

そして私たちが住むこの阿蘇にも「西国阿蘇三十三ヶ所観音霊場めぐり」というのが設定されているのです。

くわしくは、阿蘇山上の西蔵殿寺阿蘇山本堂を1番札所として出発し、阿蘇谷に降りて17か所の札所を回り、さらに根子岳と高岳の間にある日ノ尾峠を越え、高森町、南阿蘇村をめぐり、三十三ヶ所を踏破するというものです。

当時は全行程約70キロを旧阿蘇町と高森町で宿泊しながら3日間で巡礼したそうので、その姿は手甲、きやはん、わらじ履きで鈴を鳴らし、各札所をうたった詠歌を唱えながらです。まさにお遍路さんそのものだったのです。

南阿蘇っていいな、その三十三ヶ所霊場札所のうち、南阿蘇村には14か所も現存しているんですよ。

さて、今回訪れる通泉寺は三十三ヶ所観音霊場の第30番目にあたります。

きれいに整備された道からちよつと入ったところで、通泉寺を見つけました。

扉を少しずつ開けるにつれて外光が徐々に差し込み、堂内一杯に光が満たされるとき見事な千手観音さんが目の前に姿を現しました。

と同時に供えられている花の力サランカでしようか、独特の香りが充満しており、ここでもこの観音さんが地域に根ざし、地域の方々に愛されているのがうかがえます。

観音さんの高さは2メートルほどもあり、その容姿に圧倒されます。

背中から何本もの手が伸びており、人々の願いをその手で

ですくい上げようとされている様子が現実的で迫真的に表現されています。

それにしてもなんとやさしいお顔をされているのでしょうか。

癒し系というのを最近よく耳にしますが、まさに典型的な癒しのお顔です。

ところで、千手観音といいますから千本の手が本来はあるべきなんですが、作られた当時は物理的にも浄財的にも無理なことが多かったんでしょうね。

時代が下れば中央の手を合わす2手を除き、背中の左半分に20手、右半分に20手の合計40手を作り、仏の世界では25の世界があるとされることから、40手×25で千になるという考えからも手を略して作られていたそうなんです。

ところが、世の中にはあるところにはあるんですね。

奈良市の唐招提寺、藤井寺市の藤井寺には、忠実に千本の手を付けた千手観音があるんですよ。

余談ですが、私は奈良市の薬師寺にある薬師如来の脇侍として有名な日光・月光菩薩と唐招提寺の千手観音が見たくなってつい先日行ってまい

りました。

車で走ること約9時間。翌日は電車とバスを駆使してそれらの寺院を貪欲に見て回りましたが、特に日光・月光菩薩の前では、まるで恋人でも見るかのような放心状態の顔をしていたと、隣に一緒にいた連れ合いがいきなり顔でつぶやいていました。

また唐招提寺の千手観音は圧巻そのもので、小さく作られた手はちょうど孫の手ほどの大きさになっており、それらが背中いっぱいにびっしりと付いています。

そのほか東大寺の大仏殿など、仏教美術の真髄を見ることができた旅になりました。

ここでみなさんにおたずねですが、ここまで難なく覚えられましたか？

仏像の世界はとても奥が深く、説明している私もときどき頭が真っ白になりますが、ま、とにかく行けるとこまで行きましょ。次回もお楽しみに。

(記事と写真)

県文化財保護指導委員

笠野 次雄